

月刊 岩小舎 9月号

■ 劔岳合宿の記録 (自主山行・講習山行)

「」 8月8日(日) 「」

源次郎尾根 Aチーム

「」

◆メンバー:横川秀樹(L)、伊藤幸雄(SL)

◆記録 :横川秀樹

3時に起床。手早く準備を済ませ、4時前に出発。あたりは真っ暗だが、前日に取り付きまで歩いているので問題はない。

少しすると、劔沢の中央、水流沿いに歩いている単独行者が視界に入る。大石から大石に飛び移りながらなにやら苦労しているようだ。右岸の道に気付いていないらしく、我々の姿を見てようやくそのことを悟ったようだ。あのままいくと、落差のある滝上に出て危なかったかもしれない。単独行氏は我々の後に続く形となる。

雪渓が現れて土石流の塊を越えると源次郎尾根の取り付きだ。無雪期はしっかりと踏み跡から「尾根ルート」に入っていく。登攀具を付け、ここで単独行氏とお別れ。

明瞭な踏み跡から始まる尾根ルートは、ときどきⅡ～Ⅲ級の岩場が出てきて、それなりに緊張感がある。また先行パーティーもいないため、進路が分かりにくい地点では、偵察しては戻り、さらに偵察しては戻るといった作業が必要になった。

そうこうするうちに、源次郎尾根へのもう一つのアプローチである「ルンゼルート」へのトラバース道が現れる。そこから先、尾根ルートは途切れているように見えたので(実際は続いていたようだ)、迷わず明るく開けたルンゼに入っていく。多少の浮石はあるものの概ね快適な岩稜歩きという感じ。しかし、ロープなしでは緊張す

る場面がないこともない……。

と進んでいると、尾根(中央ルンゼから

【今月の目次】

■ 劔岳合宿	
源次郎尾根 A, Bチーム	1
チンネ左稜線	3
早月尾根～劔岳北方稜線縦走	5
長次郎谷	7
八ツ峰下半部	9
八ツ峰六峰Cフェース	10
龍王岳 東尾根	10
■ 講習山行	
南アルプス／赤石沢～赤石岳	12
■ 同人便り じん帯繁盛記 ～その1～	13
■ 山の学習帳 No.4	14
～天気図あれこれ その1～	
■ 自主山行	
北穂高岳東稜～西穂高岳縦走	15
八ヶ岳／小同心クラック	16
和名倉山 二瀬尾根	17
～トレイルラン～	
和名倉山 滝沢(大除沢)～	19
二瀬尾根下降	
丹沢四十八瀬川／勤七ノ沢	21
奥多摩日原川／日陰名栗沢	21
二子山 西岳中央稜	22
野麦ノ森尾根～乗鞍岳	22
■ 今月の TIPS No.6	23
～事故を起こさない呪文～	
■ 長谷川カップへの道～その2～	24
■ こちら技術委員会	25
■ 編集室だより&会員一言集	26
■ 8月の山行一覧・10月号の予定	27

の踏み跡がある小さなコル部)に出る直前で、悪い草付き帯にでる。ウーム、必殺の全身フリクション這い上がり術を使うしかないようだ。滑り落ちるか落ちないか運を天に任せて、「エイッ〜」。何とかセーフ。ザイルを出して伊藤さんも上へ抜ける。

ここから先、Ⅰ峰まではルートファインディングに注意しながら、右へ行ったり左に行ったりと幅広い斜面を大きく使いながら少しずつ高度を稼いでいく。

Ⅰ峰からⅡ峰までは明瞭で、Ⅱ峰からのアプザイレンも支点がしっかりしていて問題はない。(ここで後続パーティーに一旦追いつかれる)

コルに降り立つと、その先にどこかで見た男が立っている。どうやら朝の単独行氏のような。長次郎雪溪からここに上がってきたらしい。

「ここから先、道がないんですけど、どう行けばいいんですか？」一瞬、耳を疑う質問が単独行氏の口から出る。山の世界にもときどき困った人々はあるが、彼も正にその類の御仁であった。とはいっても「ここは登山道ではないので、踏み跡などを拾いつつ進むしかないっすよ」と優しく答えてあげる。こんなワケの分からない人が事故でも起こして、巻き込まれたらたまったものじ

やないなあ・・・と少し心配したが、私の答に納得したらしく我々がザイルを片付けている間に、先に消えてくれた。ホッ。

ここから劔山頂へは1時間と少々。人の多い頂上でしばらく待つと、まず、長次郎左俣を登ってきた工藤講師の講習隊が到着、その後、源次郎尾根から山野夫妻隊、一般道から岩崎隊が続き、さながら劔岳集中山行をしたかのような賑やかな雰囲気山頂は大いに盛り上がった。

【行程】

8月7日(土)

各自、立山駅～室堂～劔沢BC。到着後源次郎尾根取り付き、下部岩壁取り付き偵察。

8月8日(日)

劔沢BC(3:55)～源次郎尾根取り付き

(4:50/5:03)～尾根上(6:49)～Ⅰ峰(8:04)～Ⅱ峰(8:48)～劔岳(10:09/11:10)～劔沢BC(14:00)

8月9日(月)

(チンネ左稜線)

8月10日(火)

停滞(ボルダリングなどで遊ぶ)

8月11日(水)

劔沢BC(6:00)～室堂(8:20)

「」 8月8日(日) 「」

源次郎尾根 Bチーム

「」

◆メンバー:山野昭人(L)、山野美香

◆記録 :山野昭人

「しかしこの日、二人が冷静さを取り戻していたわけではなく、むしろ異常心理は、頂点まで達していた。このあと二人は、あろうことか源次郎尾根に取り付いた」一丸山直樹薯 山岳遭難の現実「死者は還らず」の一節です。地図も持たないハイカー2人が、北方稜線を辿って富山側に抜けようとして道迷いとなった際の経緯を示した文章です。山塾に入って間もない頃に読んで以来、これがために“源次郎尾根”はずっと頭にありました。去年は実物を見上げ、

見下ろしただけにとどまりましたが、今年はどうとう登ることができました。

さて、以前から気になっていた源次郎尾根... 登り始めは良かったのですが、1/3も進まないうちに息は上がるが足が上がりなくなり、何メートルか進んでは小休止、を繰り返すような状態になりました。はじめは空気が薄いからか、と思いましたが、早起きのため食欲が無く、朝食を抜いたのが原因だったと思います。食べなくなったら食べれば良い、と思いながら行動していま

したが、岩登りは休む間もなく、目の前に段差が来ると上がらない足を、反射的に上げようとしてしまいます。「ゆっくり」と言い聞かせるのですが、いつの間にかいつものペースに戻ってしまいます。休憩時間になっても息を整えるのに時間がかかり、水は飲めるのですが食欲が出ません。こうなると悪循環で、結局最後まで回復せずにバテバテ状態で登りました。現在地点を確認せずに登ってしまいましたので、あれがⅠ峰で、あそこがⅡ峰だったのだな、と思ひ出す程度です。

Ⅱ峰からの懸垂下降では、昨年北方稜線から見下ろしていた所を今降りているんだな、という感慨が湧いてきました。楽しい瞬間は長くは続かず、「これだけのためにロープをもってきたのか」と思ったほどあっけなく終わってしまいました。ロープ1本で2回の懸垂に分けることも可能、とルート集には記述がありますので、懸垂の途中で支点を見つけながら下降しました。少なくとも2箇所ほどあったように記憶しています。ただし大きな棚があるわけではないので、人数の多いときには不可だと思ひます。後続のパーティーは50mロープ1本で、本来の下降

地点よりも少し上の小さめの棚まで降りて、4～5mクライムダウンをしていました。どうやらそちらのほうが合理的なようです。

懸垂下降からは本峰までは2時間、と書かれていたのですが、実際には1時間程度で到着したので、かなり近く感じました。ガイドブックとは季節が違っていました。

冒頭の2人は運良く生還しましたが、源次郎尾根には長次郎谷側の岩壁から取り付いたそうです。下部もしくは上部岩壁のどちらかを、登攀具もなしに登ったとか。必死になるとできるものなのでしょうが、無事であったのが不思議なくらいだと思います。次回があるとしたら、どちらかの岩壁にチャレンジしたいような気もしますが、もう一度尾根ルートを味わいながら登ってみたい気もしています。

【行程】

8月7日

劔沢 BC(5:00)～平蔵谷出合(6:00)～源次郎尾根取り付き(6:15)～Ⅰ峰(9:00)～Ⅱ峰(9:40)～Ⅱ峰下(10:00)～劔岳本峰(10:55)～劔沢 BC(14:20)

「」 8月9日(月) 「」

チンネ左稜線

「」

◆メンバー：横川秀樹(L)、伊藤幸雄(SL)

◆記録：伊藤幸雄

■チンネって遠いのね！

憧れのチンネにとうとう挑戦する日がきた。初めてというのは恐ろしいことで、無謀にも我々は劔沢からの日帰りプランでチンネ左稜線登攀を計画した。これが如何に大変なことなのか後々思い知らされることになった。

2:45、テントの外は暗く静かである。我々は足取りも軽く劔沢BCをスタート、劔沢雪渓を下り4:20長次郎谷に着いたが、このころになると真砂沢からも続々とパーティーが長次郎谷に入ってきて蟻の行列状態になった。

6:00 八ツ峰V、VIのコルに着く。我々はVI峰の右側ルンゼに登りCフェースからの迂回路にでた。そこから懸垂をして池ノ谷乗越につながるトラバース道に降り、池ノ谷の門を通過してガ

リーを下り三ノ窓に向かった。しかしここはガレが流れるように崩れていき足場が不安定でいやらしい。

9:40 やっと三ノ窓着。三ノ窓からはチンネが目前にくっきりと見える。三ノ窓からは雪渓をトラバースして基部に取り付くが、あと少しの部分で自分が足を滑らして滑落(約10m)。今回、荷物を軽くするためにアルミのアイゼン(10本爪)にしたことが仇になり効き目を悪くしていた。危ない教訓ダ～。

10:20 チンネ取り付き部に到着。ここまで約8時間の行程になったが、これからが本番。しかし、遠いアプローチで思った以上に体力も消耗してきていた。

■気合を入れて、さあ一登るぞ！

ここまでの疲れもあり短いピッチは自分が担当、長いピッチは横ちゃんにお願いした。

10:40 クライミング開始。廻りには誰もいなく、我々のみ。

1ピッチ目は自分のリードで凹角からの登りⅢ～Ⅳ級となっているが岩もしっかりして見て目よりは難しくなく意外とスムーズに登れた。2, 3 ピッチ目は長いので横ちゃんがリード、岩溝に登りピナクル上にでる。4 ピッチ目はやや傾斜はあるが、ガッチリしたホールドがあるので登りやすい。5,6 ピッチはⅡ級程度なのでコンテ風にのぼり時間を稼いだ。しかし 7 ピッチ目にかかるると先行パーティーに遭遇してしまい、時間待ち。先行パーティーは 8:30 にスタートしたようだが意外と掛かっている。また、悪いことにこのころから雲行きが怪しくなってきた。廻りはガスってきた。8 ピッチ目はナイフリッジで連続するピナクルを通過する。ここは高度感のあるところでよく写真に出てくる憧れの一場面である。しかし、我々は残念ながら天候が悪くその気分は味わえなかった。核心の 9 ピッチ目、リードは横ちゃん。右側のリッジから中央の小ハングを越えるところが核心。ここは気持ちよく A0 で越える。当然ながら自分も A0 をぶちかます。

このころから、雷が鳴り始め小雨も降り出してきた。残りピッチを急ぐ。

16:40、13ピッチ目終了、チンネ頭に着く。ここで、待ちかねた様に突然の大雨と雷。二人とも顔が強張り、急いで帰り支度をす。リュックを開いた途端、バケツ状態のように雨が入り込み、もう中は水浸し・重テェー。横ちゃんのカメラも水浸し・痛テェー。

我々は恐い雷を嫌って、稜線での帰路を避け多少は安全と思われる長次郎谷を下ることにした。

■仲間に感謝、感謝！……

大雨の中、長次郎谷を下る。雪渓表面は雨で柔らかくなっているため自分のアイゼンはいくつか滑る。「絶対に戻ったらこのアイゼン捨ててやる」とブツブツと独り言を吐いて

しまう。

慎重にクレバスを避けながら雪渓を下って、長次郎谷出合に降りついたのは 19:10。雨は止んでいたものの廻りはすっかり暗くなっていた。また、二人とも相当体力を消耗しており剣沢の登りは、10歩進んでは止まり、10歩進んでは止まりのノロノロ歩行になってしまった。特に最後のテント場までのひと登りがこれまた長く感じ嫌な道に思えた。

22:40BC着。全行程 20 時間・・どっひゃー！疲れて言葉も出ないぐらいバテていた。でもそこには仲間が待っていてくれた。ありがたい！やっぱり、仲間はいいなーと強く感ずる。用意してくれた熱いお茶とラーメンそしてビールで乾杯！……ああ感謝、感謝。

翌日、どこにも出る気がしない。濡れた衣服を天干しながらノンビリと剣を眺める。「あそこに登ったのか・・」と感傷に耽りながら充実感に満たされていた。

追伸) 捨てようと思ったアイゼンですが家に帰ると何故か捨てがたく、剣の思い出として大事にしました。

【行程】

剣沢 BC(2:45)～ハツ峰 V, VIの科尔(6:00)～三ノ窓(9:40)～チンネ基部(10:30)～チンネ頭(16:40)～池ノ谷乗越(17:20)～長次郎谷出合(19:30)～剣沢 BC(22:40)



「」 8月7日(土) ~8月9日(月) 「」

早月尾根～劔岳北方稜線縦走

◆メンバー:松本善行(L)、黒田記代

◆記録 :松本善行

ポイント①:劔岳山頂から小窓ノ王間…岩の脆さは皆の知るところである。池の谷の大ガレ場地帯、特に他登山者がいる場合の配慮は絶対!

ポイント②:小窓雪渓下降時、左岸のバンドへ上がる地点のペンキマークを見落とさないよう。視界不良時は下り過ぎに注意。

夜行列車にゆられ、早朝の「滑川駅」に降り立つ。薄曇りの下、閑散としている広い駅前、ひと気も少なくひっそりとしている。一年前と同じだ。その時は横川さんと二人、早月尾根を登り、劔沢本隊へ合流した。そして今回はメンバーの黒田さんの強い希望もあり、北方稜線へ向けてのアプローチとして、最終的には樺平へ下山する計画である。

馬場島へ向うタクシーでは、川崎労山のメンバー二方と乗合という形をとった(後日判ったことだが、元山塾同期のKさんの知人であった)。

馬場島(標高 700m)では昨年同様おにぎりをかじり、のんびり地図など見ながらの出発準備。劔山頂までは標高差 2,200m。とりあえず本日は早月小屋までの 1,500mを稼がなくてはならない。そこでいつも比較・対照させてしまうのが丹沢の大倉尾根。大倉バス停から塔ノ岳までの標高差が 1,200mとして、どのくらいの足ごたえかをおおよそ思い、その苦行の程度にため息をつくのである。

出発して高度 1,000mから 200m刻みにその場の高度が記された表示板がある。それを目安に休憩を入れるのが通常だ。ただどういうわけか、高度 1,600mの表示板から実際の高度と

100m程の誤差がある。おそらく高度計を持つ登山者は誰も疑問を抱かずだ。

時々雨がぼつりぼつりとくる。毎回のことだが、雨具を着るか着るまいかについての選択において、とても偶然とは思えないほど裏切られることが多い。“マーフィーの法則”というのがどういふものであったか正確な記憶はないが、それに近い法則があるはずだ。“間違いない!”(長井秀和風)。無視して着ずにいると、不思議と本降りになる。直ちに着るとまもなく止む。では考え方を改めよう。雨具を“てるてるぼうず”同様、“お守り”と考えることにする。着ることによって雨が止むのである。と、そんなくだらない話をしながらようやく早月小屋に到着。テントを張り終えた直後から大粒の雨が降り出す。

すっかり夜も更けたころ、小屋の主人が、私の記した宿帳の所属団体名、行き先を見たのか、わざわざテントサイトまで北方稜線の情報を伝えに来てくれた。なんでも単独者の情報から、ハイマツのブッシュが多いとのことである。また、去年もそうだったが、山塾関係者等の小屋利用(我々が来る 4, 5 日前は太田さんのグループが二泊したらしい)が多いのもあるだろう、小屋のおかみさんらしき方を含め、とても愛想よくして頂いたことに感謝している。

翌朝は 4 時台と早出し、8 時過ぎに劔山頂へ到着(後日聞いた話だが、数時間後には山塾本隊と遠足隊が集結したとのこと)。天気良好。ただ午後からの雷雨が心配である。身支度を整え、“Advanced climbers only”の注意書きに気持ちを引き締め、いよいよ北方稜線へと踏み込む。

長次郎ノ頭の手前で、先行パーティーをとり

える。彼らは慎重にザイルを使用し、右側を登っていたが、我々は左側に行く。長次郎ノ頭付近のテン場適地で休憩中の彼等に追いつく。どうやら本日の目的地は同じ池の平ということで、正直心強くなった。その後我々が先行し、ハツ峰のコルへ向って慎重にクライムダウン。

「まさかここを下るのかな？」コルにてルート確認。地獄の底まで続いていそうなガレ場を見下ろす。すると下方から「石落とすなよー！」のコール。命令口調である。内心「カチン」ときた。他に言い方があるだろう(怒！)。登ってくる彼等を待ち、その必死の形相に納得はした。あまりの凄まじいガレ場に神経がすり減って尋常ではいられないのだ。しかし下降はもっといやだな。とにかく話せばわかるというもの、和やかなムード、彼等から情報を頂き、池の谷ガリーの下降を開始する。いやはや凄まじい。数トングラスの石も動く。ここはうまくバランスをとりながら下降するとしよう。

数度目の余談になるが、ガレ場、ザレ場通過に際し、自分が落ちないのはもちろんのこと、いかに落石を起こさないかが一番神経を使うところだ。とは云っても、全く落とさないことは不可能に等しい。場所によってはスタンスすべてが浮石であったりする。だからそれを意図して、じわっと何%体重をあずけるとか、或いはその方向性などといった技術が必要となってくる。また、動いた時のフォロー、受身、と同時に次のスタンスを瞬時に捉える敏捷性等々、それは経験によって培われるものであると思う。

三ノ窓乗越からは、小窓ノ王側壁のランペ状のガレを登る。するとどうだろう。様相が一変し、高山植物とハイマツの緑豊かな草原状の稜線へ出た。今までの荒涼とした岩稜帯とは対照的だ。一部一般道と変らぬ箇所では、フツと気が和らいでゆくのがわかる。そうだ、このような場面でこそ気の引き締めが肝心とばかりに、黒田さんに対し、そして自分に対し戒めの言葉をかける。いくつか草付きのガレの下降と雪溪のトラバースを繰り返し、今度はカール状の小窓乗越

へと辿り着く。

なんとすばらしいところだろう。風が止み、静寂の中で鳥のさえずりのみがこだましている。カール特有の環境である。眼前には小窓雪溪が緩やかに下に向って伸びている。確か金澤さんのアドバイスでは池平山経由で池の平小屋であったが、ここから池平山方面は岩壁となっていて容易に進めそうもない。ガイドブックによると、小窓雪溪を下降し、途中の左岸のスラブを登る。雪溪を下り過ぎぬよう注意！とある。池平山の岩稜登りか小窓雪溪の下降か？天秤にかければやっぱり軽快な雪溪下降しかない！ガスで視界が悪くなってきたので、下り過ぎることのないよう、念の為コンパスで方向を合わせ、地図上の左岸取り付けあたりの高度を確認する。雪溪上部は少々傾斜がきついので、軽アイゼンをつける。先の後続二人パーティーがなかなか来ないのが気になったが、山の精通者とみてとったので下降を開始する。高度を下げるとガスが晴れ、右岸上部の雪溪から糸のように滝が落ちているのが見える。高度的にはまだ下降であるにもかかわらず、左岸にペンキマークを発見する。ガイドブックには載っていない左岸のバンドを伝うルートらしい。結果的にはそれが正解で、自然に池の平小屋(五右衛門風呂がある)へと導かれる。

テン場では既に1パーティーが盛り上がっていた。我々も早速宴を開始。まずは夏山お決まりパターンの外での焼き物。もちろん直火でやる。そしてビールをひっかける。昨日同様楽しいひと時。しかし、あの二人パーティーはどうしたのだろうか？もうそろそろ暗くなるというのに…。すると17時を回ったところ無事に到着された。小屋泊だという。まあつまみでもどうぞ！ということで、いろいろ話をする機会を得た。確か大阪の大学の山岳部OBと言っていた。昔はいろいろ岩場を登っていたそうだ。ひとりの方は、黒田さんの職場の近所に住んでいたりと、盛り上がるには十分過ぎる程偶然性のある話であった。

最終日は暗いうちに出発。本日中午に樺平の

最終電車に間に合うようにするためだ。早朝の仙人池ヒュッテに立ち寄る。意外にも最近テレビで紹介されたらしい名物おばあちゃんが、仙人谷の雪溪の状態が悪いことを告げてくれた。この仙人谷から阿曾原温泉までのルートは、雪溪通過が数箇所、そして仙人温泉の少し先には崩壊地の大高巻きがあったりと、思ったよりもやっかいな下降であった。そして阿曾原温泉にて休憩。缶ビールで喉を潤し、残る水平歩道を5時間あまりもくもくと歩く。途中には奥鐘山西壁の大岩壁が見え隠れし圧倒される。しかしそれ以上にこの略標高1,000mにつけられた作業道は見事であり、感動すら覚える。まだ歩いたことのない方には、樺平～日電歩道～黒部ダム

までの、いわゆる“下廊下”は当方お薦めのコース！として締めくりたい。

【行程】

8月7日(土)

馬場島(8:10)～早月小屋(15:00)

8月8日(日)

早月小屋(4:37)～劔岳(8:10/8:30)～小窓乗越(13:40/13:55)～池の平小屋(15:30)

8月9日(月)

池の平小屋(4:05)～仙人池ヒュッテ(4:50/5:15)～仙人温泉(7:00/7:20)～阿曾原温泉(10:05/10:30)～樺平(15:45)

「」 8月8日(日) 「」

基本ステップ／長次郎谷～劔岳

「」

- ◆メンバー：工藤寿人(講師)、田口浩昭、伊藤由以、南谷やすえ、阿出川忍、伊藤栄子、斉藤典子、福島彰男、池田松野
- ◆記録：福島彰男

3時30分起床、各自食事。準備体操をして4時35分出発。天気は良さそう。

ヘッドランプをつけ野営場管理所前を通り劔沢へ下る。10分位経ったころ、どうも荷物が気になる、忘れものはしてないだろうか。アイゼンを入れただろうか。どうも気になる。工藤講師に「申し訳ありませんアイゼンを忘れたようです」と言って立ち止まりザックの中身を確認。焦る、懸命に捜す。無い。急いで取りに引き返す。皆に申し訳ない。Tさんが一緒についてテントに戻り、アイゼンをバックに入れ皆の所に戻る。皆を待たして申し訳ない。二度とこういう事があってはいけないと思った。

劔沢を暫く下ると雪溪が見えてくる。その雪溪を左に見ながら進む。やがて雪溪に降り、そこでアイゼンを着ける。久し振りの雪溪歩行なので注意しながら下る。

平蔵谷出合を過ぎ長次郎谷出合に。そのの

入口は八ツ峰側壁と源次郎尾根末端が迫り廊下状になっていた。劔岳まで標高差1050m。実に登り甲斐のある長次郎谷雪溪をこれから登るのである。雪溪は泥で汚れ、又一部土石流で土が盛り上がっていた。

どんどん登りつめていくと、明日登る八ツ峰のI, IIのコル、降り口のV, VIのコルと工藤講師よりの説明を受ける。朝日で輝く雪溪を、汗を掻きながら登る。堪える…。ある所では雪溪から岩稜に渡り、又雪溪に戻る場面もあった。天気は素晴らしく良く、暑い、汗が吹き出る。次第に、左には源次郎尾根の一峰、二峰が、右には荒々しい八ツ峰が眼前に迫ってくる。凄い迫力。景色の素晴らしさに圧倒される。

長次郎谷出合から2時間。ほぼ中間地点の雪溪中央に構える熊の岩に着き休息をとる。そこにはテントが三張りあった。ここから、左股と右股とに別れるが、左股の長次郎のコルへと進む。

少し登った所で、左側に聳えたつ源次郎のⅠ峰からⅡ峰に向かって歩いている人を発見。誰かが、あれは自主組源次郎尾根登攀先発隊の「YさんとIさんじゃないの」と言う。確かにYさんとIさんである。その峰に向かって声をかける。声が届き、向こうから手が振られる。誰とはなく暫く様子を見ようと言うことになり、そこで皆で見学することに。やがてYさんIさんはⅡ峰からロープを投げ降ろし懸垂を始めた。最初はYさん、次にIさんが降りてくる。写真を撮るもの、その様子をじっと見ているもの。暫しの時間であった。

再び登り始めると、今度は同じ自主組源次郎尾根登攀後発隊のYさんご夫婦ではないかと皆で「ミカチャ〜ン」と叫ぶが反応が無いように感じた。

さらに上部に登るに従い幅が狭くなり傾斜もかなりきつく、又クレバスも所々にあって気が抜けない。あるクレバスでは、最初に講師が渡ると一部崩れ、あとに続く人をヒヤ〜とさせる場面もあった。又左右両側はラントクルフトが大きく開いていた。

やがて雪渓も終わりに近づく所で、降りられそうなクレバスを利用して注意深くガレ場に降り、そこでアイゼンを外す。そこからガレ場を登り切り長次郎コルに。そして主稜線に出て、あとは踏み跡をたどって劔岳本峰の山頂に到着。

頂上では源次郎尾根登攀を既に極めていたYさんIさんが出向えてくれた。工藤講師との握手。とうとうやったのだ。感動が込み上がる。

間もなくすると源次郎尾根組のYさんご夫婦も到着。最初はY女史、続いてY氏が。暫くすると、今度は岩崎さんが遠足倶楽部の人達を引き連れて到着。全ての隊が頂上で合流。

頂上で遠足倶楽部の人達と記念写真を撮ったあと、それぞれ下山開始。下山は一般コース。

最初はYさんとIさん。続いて我が隊、その後遠足。有名なカニの横這いの所で、最初の足の置く所を講師よりアドバイスがあった。バリエーションルートを今登ってきた後だけに一般

ルートは岩もしっかりしていると感じた。暫く慎重に下る。前劔、一服劔、劔山荘を通り劔沢キャンプ場に全員無事に帰還。延べ10時間弱の行動。初めての合宿の充実した1日であった。<今回の合宿での反省点>

ザック重量の軽量化である。立山でバスに乗る時計量したら28Kgあった。皆さんより6〜7Kg多かった。どうしてなのだろうか考えてみたら、まず軽量化を全く考えていないのである。机上講座で金沢講師の話の思い出す(準備する時に思い出せないのでは意味がない)。まず重たい要因は、すぐ頭に浮かんだのは“いも”焼酎の2L。これがまず余分。確かAさんから事前に「酒なら高いが劔沢小屋で買える」と聞いていたが、やはり、“いも”焼酎はやめて小屋のもので我慢すべきであった。

次に食料と気がつく。量が多いし、キャンプ場に遊びに来たのではないのに贅沢なものが多過ぎた。結果的に食べ切れず、皆さんに助けて頂く有様。またレトルト食品等が梱包のままのものもあり、工藤講師より指摘を受けた。全く基礎が出来ていない。深く反省。そんな事で室堂に迎えに来てくれたYuさんにロープを持って貰う有様。Yuさん申し訳ありませんでした。

【行程】

劔沢BC(4:35)〜長次郎出合(6:00/6:15)〜熊ノ岩(8:20/8:40)〜長次郎のコル(10:15/10:20)〜劔岳本峰(10:45/11:10)〜前劔(12:35)〜劔山荘(13:50)〜劔沢BC(14:20)



「」 8月9日(月) 「」

基本ステップ／八ツ峰下半部

「」

- ◆メンバー：工藤寿人(講師)、田口浩昭、山野昭人、山野美香、伊藤由以、久野眞由美、南谷やすえ、阿出川忍、伊藤栄子、斉藤典子、小林幸恵、福島彰男、池田松野
- ◆記録：小林幸恵

8月9日、午前4時集合。ヘルメットにヘッ電及びハーネス、ガチャを装着してテント場出発。野営場管理所の横から剣沢を下る。

だんだんと明るくなる。天気は曇りだが、所々に青い空が見える、今日も行けそうだ。

剣沢雪渓が出てきたあたりでアイゼンを着ける。今年は去年に比べて雪渓が少ない。長次郎出合から、長次郎雪渓を登り、I、II峰間のルンゼを目指す。喘いで、喘いでなんとか到着。

「ルンゼは、なるべく右側を登るように。」との講師の指導で、いよいよ登攀開始。岩も乾いていてなかなか快適。「ナメクジーッ!」の、悲鳴もあがるが、楽しくI、IIのコル到着。

I峰は、見上げるだけにして、II峰を目指す。

II峰から最初の懸垂下降、25m。長次郎谷側。

III峰への尾根道には、馬の背のようなリッジもあって、スリル満点。馬乗りになって、なるべく下は見ないようにして渡るが、三ノ窓側より長次郎谷のほうがよく見えるようだ。

III峰からの懸垂下降、25m。長次郎谷側。ハイ松にセルフビレイを取り、和気あいあいと順番待ち。しかし、この懸垂下降が予想と大違い、なかなかの難度。それは、下降開始直後に待っている、きつい段差の存在! それでも難なく下降した方々がほとんどでしたが、私ドモ、その横にある楽なルートを懸垂下降させて頂いた。

IV峰への尾根の途中、危険な箇所には、研究生がスリングをセットしてくださって、安全確保。『スゴーイ。』と思うのと同時に、『山塾卒業したら、同じ事が私にも出来るのかしら?』と、複雑な思いが胸をよぎる。

次は、またまた懸垂下降。IV峰から三ノ窓側へのルンゼに約25mの懸垂下降と、あるガイドブックには記載されているが、実際は40mくらいの感じ。ただ別のガイドブックには、他に二つの方法が紹介されていた。

このIV峰からの懸垂の順番待ちの時間がと

ても快適。天気がよかったので、遠く三ノ窓側に見えた池の平小屋と、その下に平ノ池が印象的で、心に残った。

さて、降り立ったIV、V峰間のルンゼは、安定してないガレ場で、踏跡も、はっきりしていなくて、ルート取りに苦労する。結局直登が正解であった。

V峰からの懸垂下降は、尾根を長次郎谷側に少し下ったところから始まる。40mが2回ある懸垂下降なのだが、1回目は2段階に分けられ、まず草つきの広いテラスと言うより、家が一軒建てられそうな、広い平らな広場に降り立つ。そしてそのまま、さらに短いガリーを降りて第1回目終了。

第2回目は、場所の解りにくかった支点を講師に見つけていただいて、懸垂開始となる。

これが、練習不足、経験不足の斜め懸垂! みんなで苦労しました。最後にクライムダウンで、V、VIのコル到着。

この頃から、雲行きがおかしくなり、時々雨がポツポツからザーッとしつこく、とても止みそうにない。

23,24期生は、早めに下山させていただくことになり、研究生を残し、長次郎谷へ下る。

アイゼンを着け、雪渓を歩くこと、数十分、激しいスコール! ザックを降ろし、雨具を着ている時間だけで、もう全身びしょぬれ。見渡せば、源次郎、八ツ峰の岩稜帯の細かな凹部までが、すでに、滝同然状態。大滝に、白糸の滝、なんて考えていたボーッとした頭に、みるみる恐怖が湧いてくる。『この雪渓、亀裂が入らないかしら。尾根道だったら、どんなにか雷が恐かっただろうな。』なんて考えてしまい、ついチンネ登攀中の自主のYさん、Iさんのことが頭をよぎる。皆、心配の様子。

途中、研究生のKさんと合流。その後、剣沢雪渓を上がっていたところで研究生全員と合流。さすが、先輩諸氏は体力も抜群。

劔沢雪渓が終わり、アイゼンを外し、一般道をテント場まで急ぐ間に、雨もほとんどやむ。チンネ登攀の Y さん、I さんが帰還したのは、夜 10 時過ぎ。全員無事帰還。感動した。

【行程】
劔沢BC(4:00)～劔沢雪渓(4:40)～長次郎出合(5:20)～I, II コル出合(6:17)～I, II コル(8:30)～V 峰頂上(13:00)～V, VI のコル(15:46)～I, II のコル出合(16:10)～長次郎出合(17:30)～劔沢BC(19:50)

「」 8 月 10 日(火) 「」

応用ステップ／ハツ峰六峰Cフェース 劔稜会ルート

「」

- ◆メンバー: 工藤寿人(講師)、田口浩昭、伊藤由以、阿出川忍、伊藤栄子、小林幸恵、福島彰男、池田松野
- ◆記録 : 田口浩昭、伊藤栄子

【田口浩昭】

今日は、劔夏合宿の最終イベント六峰Cフェースである。しかし、天気があまり良くない、雲行きが怪しい。皆、昨日の疲れがまだあるようだ。

4 時 10 分テント場を出発した。長次郎谷出合で休憩を入れたが、みんな無口で元気がない。いまにも空が泣き出しそうだ。みんなの足取りも重そうだ。

長次郎谷の途中でアイゼンを脱着するので休憩をした。アイゼンをザックに入れた瞬間、ポツリポツリと空が泣き出した。ここで中止にするか相当悩んでいる様子の工藤講師、皆からは中止に、とか行こう、とかの声がするなかで雨が本降りになり、工藤さんの「中止にします」の声を聞いた瞬間、皆が元気良くなっていった。(変だな～)

無口だったメンバーの笑い声がなぜか、山に響いていた。

テント場に戻ると、久野さん、チンネで体力を使い果たした横川さんと伊藤幸さん、居るはずがない山野×2さんが迎えてくれた。それから、みんなでワイワイガヤガヤと楽しい一日だった。(やっぱり変だ中止になったのに)

【伊藤栄子】

長次郎谷出合から雪渓を上り始め、アイゼンを外してゴーロ歩きに入る準備をしている時に雨が落ち始めすこし様子見るということだったが、強く降りだし中止となった。

自分の場合、初めての経験で身体もかなり疲れて岩場に取り付くまでにかかなりバテテいて、数日間の山行は無理だと実感した。

【行程】

劔沢BC(4:10)～劔沢アイゼン装着(5:10)～長次郎谷出合(5:55)～長次郎谷アイゼン脱着(6:35)引き返し(7:05)～劔沢BC(9:35)

「」 8 月 10 日(火) 「」

龍王岳 東尾根

「」

- ◆メンバー: 金沢和則(L)、坂口理子
- ◆記録 : 坂口理子

「ただいま黒部平から大観峰までのロープウェイは、運転を見合わせております」「…は？」
8 月 10 日、晴れ。昨晚の雷でロープウェイが

止まっていることを知ったのは、扇沢からのトロリーバスを降りたトンネルの中だった。今日の予定は、まず室堂まで行き、そこから一の越へ登

り返し、龍王岳東尾根を登攀してから劔沢へ向かうというもの。アルペンルートの機動力がないと到底ムリだ。とにかく、ケーブルカーで黒部平まで行くことにする。

既に大勢の人がロープウェイの運転再開を待っている黒部平。そばなど食べつつ地図を確認すると、ここから劔沢までざっと8時間はかかるではないか。行くならもう行かねば。……しかし、ここから東一ノ越まで登るのはなあ……あの斜面、キツそうだしねえ……。未練がましく運転再開を待つも、願いむなく、終日運転休止となってしまった。あーあ、行くしかないか！というわけで、10:00、黒部平を出発。……ここ、下ったことはあるけど登ったことはないんだよねえ……息も絶え絶え、2時間の登りで何とか東一ノ越へ到着。

一ノ越へ向かう途中、天気があやしくなり、御山谷をはさんで対面に見えていた龍王岳もガスに見えなくなってしまった。一ノ越で、しばし相談。ここから今日中に劔沢に入ることは可能だが、日程の都合上、明日はそのまま帰ることになってしまう。それじゃあんまりだ。せつかく龍王を登りに来たのだから、この際、劔沢はあきらめて明日に賭けよう、ということになった(劔沢本隊の皆さん、ごめんなさい)。

一ノ越はテン場がないので、雷鳥平まで下ることにする。直接、雷鳥平に向かうつもりが、観光客の笑顔に癒されているうちに、道を失う。何故か、皆さんと共に血の池めぐりなどをしている我々。そんなこんなで15:30、雷鳥平着。18:00頃、隣に単独の登山者がテントを張った。聞けば、黒部平から扇沢に引き返し、大町から電車・バス・タクシーなど乗り物に乗りっぱなしで、室堂から入り、今ついたという。うーむ……。足で稼いだ我々は得したのかな？ま、疲れるけど。

8月11日、快晴。6:00出発。一ノ越まで1時間ほど登り返す。一ノ越から見ると、龍王岳東尾根が正面に見える。I峰からIV峰まで、なかなか堂々とした面構え。今回はマイナーなルートなので、資料が少ない。結構、立っているよう

に見えるんだけど、ホントに登れるんだろうか？……ともかく御山谷を踏み跡を辿って降りていき、取り付きで登攀準備。9:00、登攀開始。

とにかく未知のルートなので、まず、そこがルートかどうかすらわからない。ほとんどピンもないので支点はカムかハイマツ。また、ピッチは切れそうなところで早めに切ることになり、結局、I峰の登りで5ピッチを費やす。II峰からIV峰までは、細かいアップダウンがあり、ルートもまっすぐではないので、結果的にはザイルはほどいた方が賢明だった。が、我々はめんどくさいいやいや、この先どうなっているのかわからないので(これはホント)、万全を期し、アンザイレンしたまま、流しながら進む。途中、私の引いたザイルの流れが悪く、何度も金沢さんにお世話になる。岩肌やハイマツを這うザイルはやっかいだ。またルートを探しながらなので、どうしても屈曲してしまう。まあ、すっきりと整備されたクライミングルートではないので仕方ない。しかし、針ノ木やら水晶やら、遠く槍にまで見守られてのロケーションは最高！高度感もバッチリだ。登攀自体を好む人には物足りないかもしれないけれど、何よりルートを選びつつ(というより探しつつ)、登っていくのが面白い。目印などどこにもない。行けるところに行くしかない。でもそれが楽しい。うーん、マイナールートの醍醐味かも……などと、アルパインムードを満喫していると、何と、後続さんが来るではないか！いやあ、いるんですね、奇特な人が(自分らのことはさておき)。後続さんに気づいた途端、登攀スピードが急にアップ。3ピッチほどでIV峰を抜け、12:00、龍王岳山頂に到着。肩の広場で大休止していると、後続の3人組もやってきた。「感じのいいクライマー」を目指す我々はきちんとご挨拶。彼らも初めてだったようだ。まあ、何回も来る人は……少ないだろうな。

13:00出発。帰りも行きと同じく東一ノ越から黒部平へ下る。今日は、ロープウェイも動いている。頭上のロープウェイを見上げる。あーあ、楽チンそう。そのまま黒部ダムまで歩いて下りようか

とも思ったが、温泉とビールが待ちきれない……いやいや、早めの下山が安心登山の基本、と、黒部平からケーブルカーに乗ることにする。

15:30、黒部平着。ケーブルカーとトロリーバスを乗り継ぎ、扇沢に戻ってくる。

さあ！後はお楽しみの、温泉とビールですよ。大町温泉で汗を流し、駅前のカツ井屋で乾杯！いやあ、これがあるから登っているようなもの～。お疲れさまでした！

今回、ロープウェイが止まるという不測の事態で残念ながら扇沢には合流できませんでしたが、龍王岳東尾根登攀という当初の目的は果たすことができ、まずまずよかったのではないかと思います。何度も通っていながらあまり馴染みなかった山域を巡ることができたのも大きな収

穫でした。金沢さん、いろいろとお世話になりました。あとは「感じのいいドライバー」を目指せばカンペキかと(詳しくは御本人にきいて下さい)。

【行程】

8月10日(黒部平までアルペンルート利用)
黒部平(10:00)～東一ノ越(12:00/12:30)～一ノ越(13:00/13:30)～雷鳥平(15:30)

8月11日(黒部平からアルペンルート利用)
雷鳥平(6:00)～一ノ越(7:00/7:15)～龍王岳東尾根取付(8:30/9:00)～龍王岳山頂(12:00/13:00)～一ノ越(13:30/13:45)～東一の越(14:15/14:30)～黒部平(15:30)

■講習山行の記録

「」 8月27日(金)～8月30日(月) 「」

マスターステップ／南アルプス 赤石沢～赤石岳

「」

◆メンバー: 田中良一(講師)、阿出川忍、小林幸恵、ゲスト1名

◆記録 : 阿出川忍

沢登りの本に「沢の王者」と紹介されている赤石沢。大きな岩・滝の連続・激しい流れ・プールのような釜・淵・腰までの渡渉・水流に吸い込まれそうなへつり・過酷な高巻き・水と岩の色、どれを取っても今まで見たこともないスケールの大きさと美しさでした。さすが「沢の王者」です。

今回私は、その王者に会いに行くのに、大きな間違いを犯しました。沢中泊が初めてという経験不足から、長い遡行で最も重要と思われる荷物の軽量化を怠りました。その結果、パーティーの足並みを乱し、自分も体力的に大変でした。みんなが石から石へピョンピョン飛び移っていても、いちいち水に入っていました。深くて水に入れない時には田中講師にシュリングでいつも引っ張ってもらいました。最初の大きな淵で泳がなければ先へ進まず、田中講師が先頭で行きました。2番手は泳ぎが得意な私！ブクブクブク…溺れました。死ぬかと思いました。ロープは付いていましたが、ザックが重く、ヘルメ

ットを押してきて、頭が上がりません。諺で「溺れる者は藁をも掴む」と言いますが、何も掴まず、ただ、もがくだけでした。そのうちロープが引かれて助けられました。その後の高巻きでは、「溺れた私はタラの芽掴む」で、悲惨な目に遭いました。アザミやバラの比ではありませんでした。

滝は大きく、水量もかなりあるので、私達の技量では、水流の中をシャワークライミングできるような滝は1つもなく、高巻いて懸垂して、大きな岩を3点確保で越して、ホールドがない岩では、1人が馬になり隣に立つ私の肩・頭と田中講師が登って行ってザイルを出してもらおう。皆で手を握り合い渡渉して、へつって、泳いでを2日半繰り返して百間洞山の家に着。ここで遡行は終了しました。赤石避難小屋まで急ぎ、冷え切った体に熱燗のご褒美！おいしかった～。赤石沢から赤石岳、自然の中にどっぷり浸かった4日間。自分の持っている技術・体力を全て使ったいい山行でした。

【行程】

8月27日(金)

静岡(7:45)-バス-牛首峠(12:25)~入溪(12:50)
~神の淵出口上部泊(17:00)

8月28日(土)

出発(5:00)~北沢(6:00)~門の滝(7:46)~大ガ
ラン(11:00)~大ゴルジュ(11:55)~小雪溪沢手
前泊(17:00)

8月29日(日)

出発(5:00)~大雪溪沢(7:00)~大淵滝(7:45)~
裏赤石沢(8:35)~百間洞(9:50)~百間洞山の
家(13:45)~赤石避難小屋(17:20)

8月30日(月)

出発(4:50)~赤石岳頂上(5:00)~赤石小屋
(7:10)~榎島ロッジ(10:15/(11:00)-バス-静岡



■ 同人便り ~矢田 実~

【じん帯繁盛記 その1】

2004年7月19日、友人とふらりと出かけた大菩薩嶺。丸川峠を下山中、浮石を踏み左膝前十字じん帯があっけなく断裂してしまいました。

これからじん帯再建まで、山絶ちの日々が続くので、せっかくの貴重な体験を文章にしてみようと思います。もちろん工藤講師、山野編集長からの強い要望があったことは否めませんが……お題は「じん帯繁盛記」では、どうぞ！

その1「備えなければ、憂いあり!？」

休日出勤中の7月18日、友人のM氏から携帯に電話が入る。「大菩薩嶺に行かない?」二つ返事でOKし、仕事もそこそこに帰宅。バタバタと準備をして集合場所へ向かう。泉水谷林道の入口付近でテント泊、翌朝大菩薩嶺へ。

今回のコンセプトは「エアリアマップから消えた登山道を登る」選んだのは大黒茂林道。出発準備中、膝用のサポーターを忘れたことに気づいた。左膝は古傷があり調子が悪いので、いつもは念のためサポーターをしていたが、忘れたのでは仕方ない。テーピングも面倒だし「ま、いいか」程度しか考えていなかった。これがそもそも油断だった。

5:30 出発。天気は上々、沢沿いの道を軽快に登る。多少の崩壊は有るものの、特に問題なく稜線の登山道へ。「なんでこれが廃道なのかね?」エアリアはそのうち無難な道ばかりになってしまおうのではないか……山登りのおもしろさが

半減するのは感心しない。

快調に大菩薩嶺経由で雷岩へ、塩山市の設置した「NHK 武田信玄オープニング撮影地」の品の無い看板に苦笑い、展望を大いに満喫し丸川峠へ下山。軽い下りに差し掛かり、少しジャンプして左足で岩の上に着地した瞬間、岩が動いた。膝が「へ」の字に曲がった状態で大きくバランスを崩した瞬間、「ブチ」という鈍い音とともに膝に激痛が走り、その場に転がる。痛みで脂汗が流れる。M氏が心配そうに駆け寄ってきた。「やっちゃった……」うなる小生。しばらく様子を見て膝を動かす。痛みは有るがなんとか動く。とにかく車までは歩かねばならない。テーピングで固定し、枝を杖代わりに登山道をヒョコヒョコと下山。膝がぐらつき安定しない、これまで体験したことのない妙な感覚だ。何回かバランスを崩し激痛!思わず倒れこむ。そんな繰り返しでようやく下山。通常2時間程度の道のりが4時間30分もかかってしまった。

登山道を下りながら、サポーターを忘れたことを大いに後悔した。ああ「備えなければ、憂いあり!？」根気よくサポートしてくれたM氏には感謝の言葉もない。

車で最寄の駅まで送ってもらい帰宅。徐々に膝が腫れ曲がらなくなる。救急病院に行こうかとも考えが、湿布して一晩様子を見ることとした。このときじん帯が切れたとは考えもしなかった。

翌朝、近所のIN整形外科で診断を受けると、先生が一言「あ~これは切れてるね!」「え~何が……?」 (つづく)

無名山塾・本科(登山学校)のご案内

無名山塾・本科は自立した登山者の育成を目的とし、2年間で岩・沢・雪の基礎的な技術(48単位)を取得して頂きます。入会申し込み、お問い合わせは、無名山塾事務局まで電話、FAX、ハガキ、Eメールで。

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 1-39-2-1F

TEL:03-3941-3481(平日 10時-18時) FAX:03-3941-3482

メール:ZUA11617@nifty.com

入会金:10,000円、年会費:12,000円、山岳保険料:8,000円(4/1~3/31)

◆◆◆ 山の学習帳 No.4 ◆◆◆

【天気図あれこれ その1】

登山中は日常生活よりも天気による影響を大きく受けるということは、皆さん身をもって体験されていることでしょう。冬山でも天候に恵まれれば夏山以上に快適ですし、夏でも大雨につかまると寒くて凍えることもあります。

2003年末の仙丈ヶ岳では、強風のため山頂を目前にして撤退しました。今年夏の剣合宿3日目は、下山途中の雷光を伴う雨で生きた心地もしませんでした。このように、山行に大きく影響を与える天候を予測できたら装備も多少変わるでしょうし、悪天でも回復に向かっているのかさらに悪化するのかわっているのといないのとでは、行動も大きく違ってきます。

天候を予測するために、古くから山では天気図が書かれていましたが、天気予報の精度が上がり、それを携帯電話や液晶テレビで手軽に入手できるようになった今日では、その重要性も低くなってきていることは否めません。日帰りや1泊程度の山行では、よほどの事が無い限り、出かける前に天気予報を聞いていればそれで済むと思います。天候がどうであれ、もともとその場その場で対処していくしかかたないのだから、今後の天候の変化を知ろうが知るまいが一緒だという考え方もあるでしょう。

では天気図を自分で書いてみることは無意味なのでしょうか。必須では無いにしても、書けたほうが良いように思われます。ラジオやテレビの天気予報は大体時間の切れ目のニュースの前後に放送されますが、聴きたいと思うときにはなかなか放送されないものです。小さくなったとは

いえ液晶テレビはまだまだ重いですし嵩張ります。衛星からの画像で雲の広がりや良く見えますが、多くは静的な情報で、今後の雲の動きを予測できません。ましてや風がどのくらい強く吹くかは予想できません。またニュースの時間になるまで30分以上待つくらいなら気象通報を聞いてしまったほうが早いですし、365日、朝9:00、夕方4:00、夜の10:00に放送されます。携帯電話を利用すれば、待つことなく気象サイトに接続し、ピンポイントの天気予報を得ることができますが、往々にして天気の傾向を知りたいのは日数のかかる山行で、携帯電話のつながらない深い山域だったりするものです。気象通報の欠点としては、(1)天気図用紙に書き込んでいかないとほとんど意味が無い、(2)天気図を書く練習が必要、(3)聴き終わるのに20分かかかる、(4)聴き終わってから等圧線を結ぶ作業がある、などが挙げられます。

天気図を書いてみることの最大の効用は、天候の変化をある程度予測できるようになることと、テレビや携帯電話の天気予報に対する理解が深まる点にあると思います。とにかく1度書いてみると良い経験になること請け合いです。今回から始まる天気図シリーズでは、気象通報を聞いたり、天気図を書いたりする上での、筆者なりの工夫を紹介していきたいと思います。

「天気図は書けなくてもよい」と公言できるのは、天気図が書ける人でしょう。ある技術が要か不要かを判断するためには、その技術を身に付けて初めて正確に判断できるものだからです。(研究生・山野昭人)

■自主山行の記録

「」 7月30日(金)～8月1日(日)「」

北穂高岳東稜～西穂高岳縦走

「」

◆メンバー:松本善行(L)、黒田記代

◆記録 :黒田記代

私にとっての今回の山行目的は、槍～奥穂高岳～西穂高岳の縦走ルート上、北穂高岳～涸沢岳間をトレースしていないので、この区間をトレースすることです。トライするに当たり、一般登山道である北穂南稜から上がればすぐ行けるけれど、前に通っているので今度行く時は、北穂東稜から上がることを夢みていました。そして今年チャンス到来。私にとって、岩稜帯バリエーション初の自主山行でもあります。

初めの計画では、福田さん以下3名で行く事になっていましたが、福田さんの都合がつかなくなり、松本(L)・黒田の2名での山行となりました。

一日目 さわやか信州号で新宿と京都からそれぞれ上高地バスターミナルへ。6:00 集合。朝食、身支度を整えいざ出発。

歩き始めて、松本リーダーからパノラマコースから涸沢に入ろうとの提案が出た。本日は涸沢までなので、のんびりゆっくり行っても時間は十分ある。二人ともパノラマコースは行ったことがないので、ちょうど良いチャンスではないかということで、即決定。新村橋よりパノラマコースルートに入る。樹林帯の中を行くので助かるが、太陽が照りつけて暑い。途中職場の人に会い(パノラマコースを下山)、お互いびっくりすることもあった。

二日目 昨日からの時々降る小雨が止まない。降ったり止んだりの小雨。夕べは風が強かった。テントがバタバタ。ガスっていて東稜が肉眼で見えない。5時、時々霧雨で風もないので、ぼちぼち出発することになった。出発して1時間ほど北穂高岳・南稜の登山道を進む。北穂沢のゴルジュの上部に出たので、南稜コースから離れて北穂沢のカーブをトラバースし、ルンゼを詰めて東稜に上がるのだけれど、東稜が肉眼で見えないので、どのルンゼを詰めてコルに上がれば良いのかよくわからない。迷ったあ

げく、始めのルンゼは通り過ぎ(早すぎると判断して)、次にルンゼが2つに分かれている所で左側のルンゼを詰めることにした。(後で解ったことですが、右側のルンゼを行けばよかったみたい。)稜線上に上がる最後の5m程の岩が濡れて滑りやすくていやな感じだったので、ロープを出してもらい、なんとか稜線上に出る。後で考えるに、その場所がまさにゴジラ岩の直下だった。

なんとか稜線上に上がった時、雨・風ともにひどくなりだし、岩も濡れていて滑りやすく、目の前の岩を行くのは危険と判断し、少し下にトラバース道が見えたので、そこを少し行くことにした。この時、ゴジラの背はまだ先だと思い込んでいた。このトラバース道はずっと続き、左上方のごつごつした稜線に沿っている。もしかして左上方の稜線がゴジラの背かなと思いながら進むと、そのうち快適な登山道に出してしまった。どうやら東稜のコルのようなのである。後ろを振り返ると、まさにゴジラの背が目の前に現れたではないか。

ルンゼを詰めて稜線上に上がった頃風雨ともにこれから悪化する気配で寒くて、目の前の岩稜を行くのは危険であったし、2人ともゴジラの背に沿って快適なトラバース道が有るなんて、思ってもみなかった。ここに来て、霧雨はなんとかあがったが、寒い。日も照り始めた頃、北穂岳小屋に到着。9時。ガスっていて雲も多く、展望は望めそうにない。小屋でゆっくりコーヒープレイクをして、穂高岳山荘目指して出発。北穂高岳から涸沢岳へ。私の今回のメインテーマを無事クリアー。後はテン場に行くだけ。テント設営後、山荘の談話室に行き、ゆっくりのんびりビールとおつまみで2時間過ごし、山荘の外のテラスから涸沢やその周辺の山並み(前穂の北尾根、北穂の東稜、パノラマコースなど)をじっくり心ゆくまで眺めて過ごした。日は照っているけれど相変わらず風は強く、ちょっと寒い。

三日目 快晴とはいえないが、良い天気。も

のすごく風が強く、隣の撤収中のテントが下の方に飛ばされ、下にいた人がキャッチして助かった様子。テン場から 30 分で奥穂高岳に到着。西穂高岳目指して馬の背を行くが、風が強くてバランスを崩しそうで怖い。二人とも奥穂高岳から西穂山荘まではトレース済みで、スムーズに通過したはずの所なのに、風が強くて岩が濡れているせいか、二人とも何だかぎこちない歩きでやっとジャンダルムに到着。風も弱まり暖かくなってきた。後は快適な岩稜帯歩き。間ノ岳に着く頃には暑くて暑くてバテそうに。松本さんは暑そうにない。私はだめ。どうも暑さに弱くて弱くて困ったものです。ほうほうの体で西穂山荘に到着。冷たいものを飲んだり食べたりして1時間経過してしまった。上高地バスターミナルに無事下山。

【行程】

7月30日(金)

上高地(6:30)～明神(7:30)～徳沢(8:30)～新村橋(9:00)～パノラマコース～屏風のCOL～涸沢テン場(14:00)

7月31日(土)

テン場(5:00)～南稜～北穂沢ルンゼ入口(6:00)～北穂高小屋(9:00/10:00)～北穂高岳～涸沢岳～穂高岳山荘・テン場(13:00)

8月1日(日)

テン場(5:00)～奥穂高岳(5:30)～馬の背～ジャンダルム(7:30)～天狗のCOL(8:30)～間ノ岳(10:00)～赤岩岳～西穂高岳(11:00)～ピラミッドピーク～西穂独標(12:00)～西穂山荘(13:00/14:17)～上高地バスターミナル(16:30)

「」 8月1日(日)「」

八ヶ岳／小同心クラック

「」

◆メンバー: 金沢和則(L)、坂口理子(SL)、山野昭人、山野美香

◆記録 : 山野美香

7/31(土)行者小屋入り。なかなか移動しない台風の影響で時折強風や雨、霧に悩まされ、早々にツェルトの中へ。

翌朝も、当初予定していた横岳／中山尾根には霧がかかり夜半の雨で岩の状態も気にかかる。もう少し様子を見ようか… 無理せずこのまま下山するか… 思案していると、小同心側の霧が晴れてきた。予定変更、小同心へ行こう、ということに。

この時期のバリエーション自主は実質初めてということに加えて最近落ち癖のついている私は、少しでも不安を解消したくて中山尾根のトボを穴の開く程読んできた。

えっと…小同心ね、ん？ どんな感じだったかな、毎年冬に眺めてはいたっけ。たしか以前講習山行で、岩が剥がれて落ちた人がいたと聞いたことがある。不吉な予感…大丈夫かなあ。赤岳鉾泉へ行く間に幸い急速に天気は回復し、不用な荷物を木陰にデポして出発。硫黄岳への登山道を進み大同心沢を渡って右側へ少々藪を漕ぎながら進むとしっかりとした踏み跡が出てくる。あとは高度を稼ぎつつ大同心基部へ。

圧倒される大きさに迫ってくる大同心の右側をトラバースして小同心基部へと進む。

不安であれこれ質問攻めの私に、普段無口な金沢リーダーが丁寧にルートの説明をして下さった後、坂口・金沢、山野昭・山野美の編成でスタート。

山野昭リードの 1P 目はフェースをやや左に上がりチムニー沿いを直上。難しくはないが支点が少ないのと岩が脆いために慎重に登る。

緊張で顔が強張る山野美リードの 2P 目はホールド・スタンスとも豊富にあるが、やはりゲレンデとちがって支点を探すのにやや苦勞する。直上する狭いクラックでは身体を外に出すように先発隊の坂口サブリーダーにアドバイスを受けるが、高度感があることに加えゲレンデでのトレーニングとは違いザックを背負っているので思い切るのに勇気がいる。途中支点の無いところでは岩角でランナーを取るが、スリングがやや短くロープの流れが急に悪くなってしまい一旦戻ってやり直し。程なく 2P 目終了となりホッと胸を撫で下ろす。

3P 目はランナー1箇所短いピッチ。その先

があるはずなのに、なぜここに赤テープ道が？吊橋のところで 2 人も高度をあわせただけ。天気は下り坂、どちらかといえば高い方に高度を間違えても良いはずなのに。それとも気温による補正がうまくいかなかった？ そんな機能あるのだった？ 結局理由は思いつかなかったが作業小屋跡に着いた。やはり高度計がおかし、現在位置を間違えたわけではない。高度計の誤差分登ってあと 700m。

この作業小屋、周辺にはゴミが散乱していて小屋付近であることはよく分かるが、径自体は迷いやすいかもしれない。径はここから登りへ。そして笹藪の中へ。はっきりした径だが背丈以上の笹をかき分ける必要がある。そして笹の中へあつという間に消えてしまう松本さん。すぐにガサガサという音も聞こえなくなった。笹を掴み、引き寄せながら進むといくばくか太股への負荷が軽くなるような気がするが、肩の付け根が痛くなる。普段やらない動きを含むからか。少し平坦なところに出てしばらくすると藪が終わった。残り 400m。

傾斜は緩い。いままでより緩い。が、歩みは進まない。歩幅を広げると一歩一歩疲れるし、小股で歩くと足を前に出すための気力が必要になる。ようするにどうにもならない。なんとなくあきらめの境地に達すると周りに目が行った。あたりは下草が減り、苔むした様相を呈している。奥秩父らしい雰囲気だと教えてもらったが、秩父山系では瑞牆、金峰山以外登ったことのない僕には実感がわからない。今度登って確かめよう。目前の現実から離れて他の事を考え、無欲になったからかあつけなく一般道との合流点に着く。もうあと 100m。

山頂が近くなったからか少し元気になる。この先の径はもうほとんど平坦に違いないというのも大きい。そして、やはり平坦だった。山頂に着くと樹木ばかりで景色らしいものはない。休んでいると鈴の音が聞こえ、登山者がやってきた。標高 1000m 付近での休憩中に最初の 1 人とすれ違ったので今日 2 人め。彼は山梨側の三之瀬から登り、ピストンで今日中に下山するつもりだと言う。奥秩父主脈縦走路(山ノ神土)からは 1 時間 50 分で和名倉山頂に着いたらいい。ここからはどちらかと言えば下り。今日中に将監小屋まで行くには十分余裕があるだろう。

ここから僕が先になった。が、ペースが早まる。

松本さんにさっきまでと全然違うと笑われた。確かに元気で、足を前に出すのがそれほど苦にならない。基本的に下っているからだろう。そのまま山ノ神土に 2 時間で到着し、将監小屋に向かった。テント場には 2 張ほどテントがあった。飛び回るヌカカに悩まされながらツエルトを張り中へ避難する。缶ビールを 1 本と焼酎を少々飲んだら頭が痛くなり、松本さんには悪いと思ったがそのまま横になってしまった。明日はまたまた雨が降りそうだとラジオが言っている。しかも何回も。

翌日、4 時に起きるとやはり雨だった。走るのはやめて歩くことにする。初めこそ少し登ったが、単調で平坦な巻き道がずっとずっと続く。白く煙っているため目標物は全く見えないし、一体この道はどこまで続くのか。丹波に向かう分岐までの 1 時間 40 分、最後にもう一度登りがあったがそれほど楽しい行程ではなかった。この分岐で少しだけ言葉のキャッチボールが行われ、飛龍山頂に登り、その後丹波に降りてしまうことにする。

下りは速かった。初めは緩い下りのみ小走り。熊倉山を越えたあたりからは明らかに走る。こんなスピードで走るのか。転んだら打撃は大きいだろう、よくこんな径、しかもぬかるんでいる径を走れるな、と思うとその間スピードが鈍って松本さんとの差が開く。平坦な箇所では差を縮められても下りでは縮められない。特につづら折れの下りでは急カーブのターン時に差がつく。減速しすぎか。体力差、走り方の差ともあるだろう。考えているうちに丹波についてしまった。飛龍山頂から 2 時間、しかしそのほとんどは上半部にいた。走ると早いことがよく分かった。

バス停で時刻表を見ると運よく 30 分後にバスがあり、10:40 には奥多摩駅に着いてしまった。

【行程】

8 月 14 日(土)

二瀬尾根下部吊橋(10:00)～電波反射板・1330m(11:30)～和名倉山頂(14:45/15:10)～山ノ神土 (17:10)～将監小屋(17:30)

8 月 15 日(日)

将監小屋(5:10)～飛龍山頂(7:10)～丹波バス停(9:10)

「」 8月14日(土)～8月15日(日)「」

和名倉山 滝沢(大除沢)～二瀬尾根下降

◆メンバー: 福田洋子(L)、伊藤幸雄

◆記録 : 福田洋子

この計画の当初は浅村・松本プランの「和名倉山に破線ルートを藪コギで行くぞ」に乗った形で決定したが、話しを詰める段階でヨクヨク聞けば2日目は奥多摩駅まで駆抜けるランニング。これはマズイと周辺のルートを調べユキさんと検討し、御二方の早さの邪魔をせず身の丈に合った山行と云う事で、この「滝沢(大除沢)を遡行して和名倉山で合流、踏み跡をたどって二瀬尾根下降」に決めた。

はたして上手く山頂で会えるか、期待を込めての出発をしたが結果は…。

ダムの入りで浅村・松本の両君を降ろし程なく不動滝入口に到着、河原遊びに来ていた家族連れを見送り尾根を乗っ越すとF1(20m)不動滝、先着のカメラマンに「どうぞ」と言われるが行ける訳もなく丁寧に遠慮申し上げて右手に踏み跡を探しながら高巻き、そのままF2も巻いて河原に降りる。ここで仕度をしながり返りを観察する、やはり丹沢や奥多摩より沢が一回り大きく感じる。

入渓してからも最初の印象そのままに水量多くゴロ自体が大きい。滝そのものの高さはそれ程ではないが深い釜を持っている為とにかく巻いて行く。そのうち滝を越えたんだか岩を越えたんだか判らなくなり、しかも岩は益々大きくなって全身使ったのゴロ岩越え状態が続く。ほとほと岩と水線との上がり降りも辛くなり、しまいには土砂が堆積した上ばかり行くようになる。ユキさんに「この下に4m滝有った？」と聞いても返事は無い。ン～、相方もかなり岩越えが嫌になっているらしい、先日の合宿の疲れも抜けていないのか何時もより歩きのペースも遅く私としては助かった。

地形図での位置はこの辺だからと検討をつけた頃に漸く遡行図と合致する15mS字滝に出会う。場所の確認が出来てほっとした。やはり自分の現在地がはつきりすると落ち付く。因みに、このS字滝は水を垂直に落としF1に次ぐ迫力。左のガレから登り、滝の落ち口に涉りあがる

だけなのだが唯一ここだけザイルを出した。落ち口を流れる水流の勢いに、どうしてもザイルを出さないでは行かせたくなかったし行きたくもなかった。

その後に見れた大滝も迷わず巻く、目的が登頂なので滝へのチャレンジはこの次となり決断は早い。

1150mの二俣に2時間20分で到着、そこからは滝らしい滝も無く(小滝やナメはあったが)とにかく地形図と尾根・枝沢と高度を確認しながら進んだ。先ほどの二俣で調節した高度計が1500mを示し時間も14時、水量はまだまだ多く流れの先には何段にもなっている15m以上はありそうな滝も見えていて源頭の雰囲気では無い。が、地形図からするともう右岸(南東)の尾根を目指さなければ周囲が立ってきて大変そうだったので左から流入する枯沢の一つに入りツメて行くことにした。

ツメ始めて暫くすると沢床がナメからガレのルンゼ状となり支尾根に吸収され廻りは石楠花がまばらに生えた岩・土ミックス帯となり獣道・岩棚・灌木と使えるものは何でも使い、手も足もフル活用で攀じ登る。さらに進むと石楠花密集地に突入。獣の視線で隙間をねらうも行き詰まっては二番手が別の突破口を探し木を押し広げて進み。又、行き詰ると相方が別の隙間を四つん這いで潜り抜け…かわるがわるトップを交替しながらも方向だけは狂わないように気を付けて悪戦苦闘の末、二瀬尾根の踏み跡に出た。1800m地点16時のサイレンが遠くで聞こえた。2人で思わず万歳と握手で喜びを分かち合う。「ヤブ何級位かね、1時間以上は漕いでたよ。」「1時間に数mが6級でしょ、ウン、4級位かも」などと言い合いながら一本入れて方角と踏み跡を確認。「おいおい、これは登山道だよ…」そう破線ルートでヤブがイッパイの筈の二瀬尾根は、ずいぶんと良く踏まれた登山道になっていた。「これじゃヤブ漕ぎ2人組はとっくに和名倉山は越えて将監峠行ってるね。」

最初の計画にあった山頂集合はこの時点で二人の頭からコブシ位にしぼみ、20分程進んだ登山道脇に絶好のテン場を見つけた時、完全に霧消。山頂まで残す高度200m弱で1日目の行動終了とした。

2日目、ツェルトに余分な荷物をデポして和名倉山頂に向う。昨日あんなに格闘した石楠花の木も登山道から眺めればかわいらしい。苔の絨毯も美しいではないか、樹林も濃くてさすが奥秩父なんてこと思いながら50分で到着。

奥秩父の秘峰と云われているが何の見晴らしも利かない山頂。でも苦勞して到達すると標柱だけでもいとおい。来た道をもどりながら計画の時にテン場として予定していた「千代蔵休ン場」など確認、確かに拓けてはいるが岩が多く風も通り「ここにしないで良かった」と二人で妙に意気投合。自分たちのテン場にもどりツェルト撤収。元あった状態に戻し出発。

昨日、浅村・松本の両君は、どんなルートを歩いて来たのかな？と、期待と予想を胸にしてフンフン進む、しかし本当に踏み跡がしっかり付いている。背丈を越すほどの笹ヤブに突入しても足下を良く見ればちゃんとあるのだ。これだったら私達の昨日のツメのほうがよくよっぽどヤブ山行だったかな？

ただ破線ルートとなっているだけあって、指

導標とかは無い。造林小屋跡の辺りは踏み跡も錯綜していて地図コンパスで方向を確認。軌道跡になると同じ高度をひたすらトラバースする為とにかく長い道のりだ。電波反射板について漸く眼下に秩父湖を見晴らすことが出来た。ここからイッキに高度を800m下る。降り立った二瀬ダムから見上げれば先程の反射板がキラキラきらめいている。そこで二人の口をついて出た言葉、「ここを登るのは嫌かも…」「沢から登って正解、二瀬尾根は下降路でいいよ」でした。和名倉山に登る沢は今回の大除沢の他に初級で曲沢・金山沢、とっても有名な和名倉沢なんてのもありますし、次はどこから行こうかしら。ね、皆さん。(ヤブ漕ぎとしてはヒルメシ尾根なんてのも有りかな?)

【行程】

8月14日(土)

不動滝入口(10:00)～F1 不動滝～F2～入渓点(10:40)～1150m二俣(12:30/12:40)～1500m(13:50/14:00)～1800m登山道(16:00)～1850mテン場(16:30)

8月15日(日)

テン場(5:30)～和名倉山山頂(6:20)～テン場(7:10/8:00)～二瀬ダム(11:30)～不動滝入口(13:00)

◇ Mt.Book ② ◇

『我々はいかに「石」にかじりついてきたかー日本フリークライミング小史』 (東京新聞出版局 菊地敏之著)

「最新クライミング技術」の著者、菊地敏之さんの新しい本が出ました。鷹取、日和田、小川山、そしてヨセミテの岩にかじりついた若者たちの、青春群像です。有名登攀ガイドさんたちの、若かりしころの武勇伝に抱腹絶倒。おもしろいです。小川山の広瀬ダイレクトを開いたのは広瀬憲文さんですが、その広瀬さんに小川山の潤沢岩峰群の存在を教えたのが岩崎元郎さんだとは。本の帯には「人気の新スポーツ、フリークライミングの始まりから現在まで」とありました。

(研究生 日浅)

「」 8月15日(日) 「」

丹沢四十八瀬川／勘七ノ沢

「」

◆メンバー: 斉藤典子(L)、伊藤栄子(SL)、小林幸恵

◆記録 : 斉藤典子

夜中からの雨は降り続いていた。渋沢駅から車で表丹沢県民の森方面へ向かい二俣へ。鍋割山小丸コース入り口手前の駐車場で身支度。

F1(5m)はザイルを出し栄子さんがリード。私は沢自主で初めてビレイする。F2(7m)を越えF3(8m)は滝の右を登り先に登る人のスタンスをじっくり見て登る。F4は滝の右側、土の部分から岩へ取り付く。堰堤を5つ越え、ときには石垣をそのまま登るのもおもしろい。そして水量たっぷりのF5(15m)は左から巻いた。

小滝をいくつか越え三俣を確認する。雨のせいかわの水はなかなか涸れてこない。右から入るガレの急斜面をじわりじわりと這いつくばって

登り藪を漕ぎやと稜線に出た。ありゃ？花立山荘の反対側に出たようだ・・。三俣の真ん中を行っただが右側の沢を詰めていたのだな～・・・。

雨で水量が増えたとはいえ沢の支流の読み方のむずかしさを知りました。自分自身の反省点たっぷりです。今度は間違いなく詰めてまた行ってみたい沢です。

【行程】

勘七ノ沢出合前駐車場(9:00)～F1～F5(11:30)～大倉尾根(14:00)～堀山ノ家經由勘七ノ沢出合前駐車場(16:00)

「」 8月16日(月) 「」

奥多摩日原川／日陰名栗沢

「」

◆メンバー: 伊藤栄子(L)、南谷やすえ、久野真由美

◆記録 : 伊藤栄子

東日原駐車場から一台の車に乗りこみ松尾

尾根を回りこむあたりの空き地に駐車した。ルート集の説明のように名栗橋まで行き戻って確認したので、判りやすかった。

踏み跡もしっかりして、日原川に降り渡渉となったが、前日の雨の影響で水流は勢いよく、濁っていて一足一足浅い所を探りながら進んで行き対岸を登り、名栗沢に入った。

出合5mの滝は水量も多く、滑ったら叩きつけられるような雰囲気のため、右より巻いた。次々と4～5mの滝が現れ越えていくと長さ40mのナメ滝になり、きれいなので見学時間とした。二の沢出合の先の7mの滝は直登不可能で左岸を巻き、遡上して行くと次々と苔むしたナメが

お知らせ

原稿の宛先

月刊岩小舎の原稿は、下記までお願いします。

講習山行⇒山野美香

自主山行⇒福田洋子

同人便り⇒坂口理子

今月の一言⇒横川秀樹

メールアドレスがわからない場合は、sanjc2004@yahoo.co.jpまでお問い合わせ下さい。

続き日本庭園のようだ。

10mトイ状の滝を快適に直登し進むと四の沢が左岸より伏流で入り、5~6mのナメを次々越えると、左から五の沢が白糸の滝を思わせるような姿を現した。水は伏流にならずに六の沢の出合に着き遡行終了とし下降に入った。

懸垂場所が3箇所とっていたが、下降してみると巻いた7mの滝のみで、実際には登りと下りの感覚が違うことを知った。

当初の計画では、鞍部を目指し下降する予定だったが、登攀の要素は少ないが距離が長かったため、時間を決めて下降にした。1泊計画で、ゆっくりした遡行をすると良いと思った。

【行程】

入渓(8:45)~六の沢の出合(11:50)~下降終了(15:00)

「」 8月21日(土) 「」

二子山 西岳中央稜

「」

◆メンバー:伊藤栄子(L)、伊藤幸雄

◆記録 :伊藤栄子

2ピッチ目、オリジナルの凹角フェースから行ったが、見たのとは大違いで少し乗り越す感じのところが上がれず更に左のフェースに回り込んだ。

4ピッチ、逆くの字型に行き支点が見えたのでランナーを取ったが、ロープの流れが悪くなりセカンドにも無駄な動きをさせてしまった。目先の支点に惑わされたと反省した。

5ピッチ、セカンドで左上のクラックに向かうが、ホールドはしっかりしているが右足を滑らせ

ぶら下がった為、気持ちが悪くて(?)どうあがいても乗り越せず、ズーと右に回りこんで上がった。

自分が登れるルートを探すことと、支点のある所が難しいことを理解した。

【行程】

1ピッチ目スタート(8:40)~3ピッチ終了(10:30)~終了点着(12:40)

「」 8月22日(日) 「」

野麦ノ森尾根~乗鞍岳

「」

◆メンバー:黒田記代(L)、阿出川忍、斉藤典子

◆記録 :阿出川忍

私達の歩いた野麦ノ森尾根は、野麦の集落~乗鞍岳を目指す道です。

乗鞍スカイラインの開通で、豊平までマイカーで入れるようになった今日、歩く人は減り、道が荒れ、2004年度版のエアリアマップからは、破線さえも消されてしまいました。でも、歩いてみると、心配していたほど荒れてはいなくて、高

い笹藪は続きますが、泳ぐように進むところは、30分程です。踏み跡もあり、途中からはテープもありました。歩き出して2時間半は、静かな森の中と笹藪のゆるい上りですが、岳谷滝の水の音が聞こえてくる頃からは急登が始まります。2150mで滝のすぐ下を渡渉します。ここまで来た人しか見ることのできない、きれいな滝です。

水しぶきをあびて渡りました。その先の急登が終わると視界が急に開け、沢筋の岩場に出ます。ここも1度渡渉(トラバース)するのですが、幅が20m位で角度もかなりあるので、ちょっと怖いです。水流に足を取られないように思わず手を付くと冷たくて痛い！さすが3000mからの雪解け水です。2600mを過ぎると沢の水も潤れ、辺り一面、色とりどりのお花畑に変わります。前方には剣ヶ峰の頂上小屋も見えてきます。あとは小屋を目指して頑張るだけです。

高天原から先はコマクサが多く、最盛期は過ぎてきているものの、踏まないで歩くのが大変な程でした。そして、ロープを跨いで剣ヶ峰頂上で握手をしました。

今回歩いた野麦ノ森尾根は、変化に富んだ山歩きができるとても良いコースです。地図から

抹消されてしまったのは、とても残念だと思いました。

最後に野麦の集落に「野麦の郷」という大きな民宿があるのですが、ここのご主人がとても親切な方だと、付け加えさせて下さい。夜遅くにタクシーで公民館前まで行き、私達が公民館の軒下で野宿の準備をしていると「こんな所で寝たら、寒いし、熊・猪・猿が出るから危ないよ」と心配して下さり、「お金はいらないからうちに泊まりなさい」と勧めてくれました。寒いのは覚悟の上でしたが、野生動物は怖いので、お言葉に甘えさせて頂きました。

【行程】

登山口(7:00)～剣ヶ峰(14:00)～豊平(15:20)

今月の TIPS (No.6) ～事故を起こさない呪文～

今回のTIPS。ここでお伝えする呪文を唱えれば確実に事故が減らせませす。疑い深いあなたは「えっ？本当なの～？」と思っているかもしれませんが、私はウソはつきません。

クライマーは、登る前に「BARK(バーク)」と唱えてください。
終了点に着いたら、再び「バーク」と唱えてください。
ビレイヤーも同様です。ビレイをする前に必ず「バーク」と唱えるようにします。
また、懸垂下降する前にも「バーク」です。

「バーク(BARK)」にこめられた意味は次のとおりです。

- 【B】Buckle ……バックルの折り返しを確認すること
- 【A】Anchor ……アンカー(支点)の状態を確認すること
- 【R】Rappel/belay device ……下降器(または確保器)の状態を確認すること
- 【K】Knot ……結び目の状態を確認すること

こういう些細なことを、常に確認する癖をつけることで事故の確率をぐっと減らすことができると思います。初心者から上級者まで面倒がらずに実行してほしいことのひとつです。(研究生・横川)

(※さまざまな場面においては、確認の必要がない箇所もありますが、チェックもれしないように「バーク」と唱えるようにしましょう)

長谷川カップへの道(その 2)

いよいよ近づいてきました「日本山岳耐久レース 長谷川カップ」。参加される皆さんは日々トレーニングに励まれていることと思います。

今回は、初参加となる金沢さん・日浅さんにお話を伺いました。

金沢さん: 日頃のトレーニングは「庭いじりとかブラブラ散歩」

目標タイムは「・・・帰ってくること」

「バカヤロー」、「カッコつけてんじゃねーの」、「ふざけるな」・・・など罵声を浴びそうですが。本当なんだもん(笑)。

長谷川カップは「これくらいのところを日帰りでいけないならヒマラヤにはいけないぞ」といったところからスタートしたとか。

ですからこれは(私的には)目標ではなくスタートで・・・ということでご理解ください。

日浅さん: 参加のきっかけは「長一く歩いてみたい」「山城を踏破してみたい」と思ったから。昨年の高尾山から御前山手前までのカモシカ自主、今年の日の出山から高尾山までのロング縦走自主で「ひたすら歩いてつらいけれど、楽しいな」と思ったから。

申し込んだ当初の目標は「完走」。その後、だんだんしぼんで、「やれるところまで」。

今は「参加することに意義あり」。経験者から「がんばりすぎると、膝などを故障するよ」

「ひどい場合は、2、3ヶ月使い物にならない体になる」と助言され、ど、ど、どうしよう。すでに左膝がちょっと痛い。上野のスポーツ店では「靴ズレ対策ですね、問題は」と言われ、さらに困ってます。このところ時間がなく、歩きこんでいないので、とにかく、参加して一生懸命歩けば、それで十分です。

日頃のトレーニングは心肺機能強化のために、とにかく、走る。駅までの歩いて10分も走る。近くのスーパーへも走る。国会議事堂の駅から特許庁下の急坂も走って登る、走って降りる。足には重り1キロずつ。膝のスクワット。ちょっとした山なら走っており。例えば、三つ峠の裏道なんかは、ぼんぼん走る。登りも、できるだけ早足。コースタイムの8割から6割を目標。＝以上は、細々なりとも実行しています。

5キロ減量。平日のコース分割試走。週三回のジョギング(1回 10キロ以上)＝これらは、まったくやれてません。減量どころか、ちょこちょこ走ってたら、お腹がすいて、増量しちゃったし。

私にとってとても重要な会議が、10月中旬に北海道は紋別であります。中旬開催ということだったのに、それが10日前後に変更になりそうです。紋別は遠い。どうやって戻ってくるか・・・。新たな難問が思いがけなく発生。困っています。

応援団長候補であった同人・坂口さんが締め切りギリギリでエントリー。本科24期の松永さんも加わり無名山塾から総勢9名の参加予定となりました。経過速報もHPでリアルタイムに確認できるそうです。皆さん応援よろしく願致します。

第12回 日本山岳耐久レース「長谷川恒男CUP」
～奥多摩全山(71.5Km) 制限24時間～
2004年10月10日(日) 13:00 五日市会館前スタート

■こちら技術委員会～講師/金沢和則～

「タイミング」

ロープワークなど技術論については机講座にて、また月報コラムなどにも掲載されていますが、ここではどんなときにロープを出したらいいのか？なんてタイミングについて考えてみようかと。先月に似たような話題か。

(現場にて)慣れない人が加わっている場合や、明らかに困難な状況なら迷いもない。でも気心も知れ、よく一緒にいくメンバー。力もそれなりにあるし、そろっているとき。(そしてその場所は)なにかあれば危なそうだけど、でもなんとなくなってしまうそう・・・な程度。

「こんなところで出していたら時間も使っちゃうし」ナド思ってしまう時ってありません？慣れてくれば慣れてくるほど。お互いにいけちゃうメンバーならば尚のこと。

じゃあ、どんなときに出すのか、また出さないのかといった結論は・・・ソノキニ応じてになってしまうのだけど(笑)、ま、考えてみようかタイミング。

こんなことがあったっけ。よくいくメンバー数人と雪稜の山。コース全体としてははじめは問題ない雪稜、後半に核心が続く構成だ。はじめの雪稜の途中で短いけど(注意しないといけない)ちよつとしたギャップがある。

そこは少しだけの下り、「出さなくていいよ、いけそう」とひどりは言う。確かに無くてもなんとかなりそう。でもリーダーは「ちよいと億劫がらずに出そうか」と決断。ささっとセット。ささっと通過。

なんで出したのか。

より安心のため。いや、それもあったかもしれないが、メンバー全体の雰囲気慣れから来る安易さが感じ取れたから・・・ま、大袈裟な表現かもしれないけど(笑)。

ともかく、ここでは全体のリズムと意識のリセットを考えて、取って！のロープ使用(カッコ付け過ぎ)。これが良かったのか？！その後の核心部分はなんとかクリア、無事何事もなく帰路に。ま、こんな使い方も在りかと。

いずれにしろ迷うこともあるだろうけど、決めたら中途半端にしないほうがいい。きちんとスムーズにできる背景があれば、「出すの面倒だから」と億劫になり、結果、ドキドキだったり、悔やんだりすることだけはなくなる。

ロープ出そうか出すまいか迷うところで、出しているとつい気にしちゃうんだよね、気の弱いわたしとしては。他から「そんなことしていたら、いつまでも着けないぜ」と文句つけられているように感じたり・・・

でも。「登高中に墜落してしまえばどうせ頂上には着けないのだから、この文句はその点で間違っている」とは、ある本の一節(読んだことある?)。

ともかくサクッと扱えるように、また自信を持つようにするには意識してのロープワーク、事前のお勉強も必要かな。錆びてしまわないようにね(笑)。

お知らせ

メーリングリストのご紹介

無名山塾の本科、研究生、同人、講師の連絡用に sanjc2004 メーリングリストが運営されています。現在、本科生 10 人、研究生 12 人、同人 4 人、講師 3 人が登録しています。登録がまだお済みでない方は是非登録の申し込みを下記アドレスまでお願いします。

sanjc2004@yahoo.co.jp

■□■□ 編集室だより ■□■□

充実度満点の劔合宿。去年よりも日程が長いことを踏まえて、今回は「軽量化」と「こだわり」を意識してみました。これは相反する面もあり、アレコレ悩みながらの準備となりました。

「軽量化」はアルミ合金の 12 本アイゼンを購入。靴のサイズに合わせて余った調節プレートをノコギリでカットすることでさらなる軽量化を計りました。グラム数にすれば微々たるものですが、そこまでして軽量化に努めたということが気分的には大きく影響するような気がして。

そして「こだわり」はビーチサンダル。小屋への買出し、水場やトイレへ行くときなど、長時間歩いてきて疲れた足に登山靴を履いて動き回るのは煩わしいものです。去年履いている人を見て羨ましく思い、今年は絶対に持っていくゾ！と決意していた一品でした。来年は、更なる工夫でより快適な合宿にしたいと思っています。(m)

～*～*～* 8月の一言集 ～*～*～*

◆8月は、劔と北海道の山がメインだった。自然の大きさに己の小ささを思い知らされた。“もっともっと大きい人間になるぞー！”(外見じゃなくって！中身の事！)(YUI)

◆高山に行っていない鬱憤を晴らすべく富士山御殿場口へ。7合目過ぎで膝に激痛、赤岩山荘目前で敗退。ん？先月の一言に同じようなコメントが・・・リベンジするぞ。(FUKU)

◆オリンピックの応援で、寝不足でへろへろの夏でした。柔道を習いたくなってしまいました(笑)。私の金メダルは赤石沢遯行。北京への課題は高所恐怖症の克服。(阿出川)

◆9月のランニング目標:300km/月 and 40日間の禁煙。「クライマー」より、「アスリート」でありたい今日この頃。なんともおそろべし！ハセツネ効果。(松本)

◆劔岳に参加できるように技術を研ぎます。(松永)

◆8/14 親不知海岸にたどり着き、日本海に足を浸す。バンザーイ。親不知から野麦峠までトレース。太平洋、御前崎目指して歩き継ぐぞー。エイエイオー。(kuroda)

◆感慨深い劔合宿から帰ると、お仕置きのように仕事の山！工藤講師から「仕事は元来お仕置きのようなものだ」との名言を頂きました・・・。(久野)

◆念願の源次郎尾根、時間的には順調だったけどバテバテだった。(山野昭)

◆下山後、久しぶりの(信濃)大町へ。よくビール&食事に寄っていたお店が消滅。ちょい残念・・・。これくらいしか書くことないのも何気に残念。(kanazawa)

◆思いもよらなかった膝の故障から1ヶ月半、長期戦が確定！山に行けないもどかしさ・・・。仕方が無いので、技術書片手に公園であれこれ。これはこれで結構楽しい。(矢田)

◆先日、早池峰山に行ってきました。あのハヤチネウスユキソウを見たと確信しています(でも図鑑は見ない。・・・見たくない。)(R子)

◆劔の合宿は有意義だった。帰りの地獄谷からミクリガ池への階段が堪えたのではないのでしょうか。何段位あったか分かりますか。なんと527段。由以さんと数えました。(福島)

◆7/17 に某所で腰を捻って歩行不能に。第5腰椎剥離の診断の瞬間に私の夏は(秋も?)終わっていた。冬までには復帰したいと静養中ながら、休日に自宅に籠るのは辛い(木之下)

◆大常木谷のおまけ。青梅駅前の『華美楼酒家』で食べたエビチリ定食¥800 が美味しかったし、マスターの『ありがとうございます。』の(中国人のような)挨拶にホットした。(いとうえいこ)

◆山に行くと思いが強くなる。けれど日々の生活もまた味わい深い。大常木谷のタープで聴く雨と雷と清流の音。なぜか落ちついた。(ぶひよ)

◆今年は劔の合宿に参加出来たこと。そして、8月の自主で野麦峠から乗鞍を目指し藪をこいで、ひたすらコンパスを頼りにたどり着いた山は格別の感があります。(斉藤)

◆チンネ日帰りコースから帰ってしばらくボーとしている日が続いている。これは疲労感からか充実感からか！(ゆKIお)

◆構想4ヶ月。ついに深川SCの人工壁貸し切りが実現。お力添え、ご協力を頂いた皆さんにこの場を借りてお礼申し上げます。次は 10/4、10/18、11/1 と続きます。(横川)

■8月の山行一覧

	種類	場所	日程	メンバー	記録
1	自主	北穂高岳／東稜 ～西穂高岳	7/30- 8/1	黒田(L),松本	黒田
2	自主	八ヶ岳／小同心クラック	8/1	金沢(L),坂口,山野昭,山野美	山野美
3	講習	劔岳 長次郎谷 八ツ峰下半部	8/7-11	工藤,田口,伊藤由,南谷,久野,伊藤栄,斉藤 阿出川,小林,福島,池田	福島 小林 伊藤栄 田口
4	自主	劔岳 源次郎尾根 チンネ左稜線	8/7-11	横川(L),伊藤幸	伊藤幸 横川
5	自主	劔岳 源次郎尾根	8/7-11	山野昭(L),山野美	山野昭
6	自主	早月尾根～劔岳北方稜線 縦走	8/7-10	黒田(L),松本	松本
7	自主	龍王岳 東尾根	8/10-11	金沢(L),坂口	坂口
8	自主	和名倉山 二瀬尾根	8/14-15	松本(L),浅村	浅村
9	自主	和名倉山 滝沢(大除沢)～ 二瀬尾根下降	8/14-15	福田(L),伊藤幸	福田
10	自主	丹沢四十八瀬川/ 勘七ノ沢	8/15	斉藤(L),伊藤栄,小林	斉藤
11	自主	奥多摩日原川/ 日陰名栗沢	8/16	伊藤栄(L),南谷,久野	伊藤栄
12	自主	日和田 RCT	8/21	松本(L),宮下	—
13	自主	二子山 西岳中央稜	8/21	伊藤幸(L),伊藤栄	伊藤栄
14	自主	野麦峠～乗鞍岳	8/21-22	黒田(L),阿出川,斉藤	黒田
15	講習	南アルプス/ 赤石沢～赤石岳	8/27-30	田中,阿出川,小林,ゲスト 1名	阿出川

月刊 岩小舎 10月号の予 定

【掲載予定】

- 講習山行
 - 日和田②
 - 多摩川源流／大常木谷
 - 御在所岳 クライミング
 - 小川山 フリークライミング
- 技術委員会企画
 - 谷川岳／東尾根
 - マチガ沢本谷～東南稜
 - 幽ノ沢V字状岩壁右ルート
- 自主山行
 - 藤坂ロックガーデン RCT
 - 広沢寺 RCT
 - 日和田 RCT
 - 丹沢中川川／大滝沢本流(鬼石沢)

☆原稿は 10月5日締め切りです。

発行 無名山塾(埼玉県山岳連盟所属)
 住所 東京都豊島区南大塚 1-39-2-1F
 電話 03-3941-3481
 FAX 03-3941-3482
 HP <http://www.sanjc.com/>
 編集長 山野美香
 編集部 坂口理子・福田洋子・横川秀樹

- 机上講座の予定
 - (於:豊島区立勤労福祉会館 19:00～)
 - 9月30日(木)「読図とルートファインディング」
 - 10月29日(金) 雪山入門-1「装備と服装」
 - 11月25日(木) 雪山入門-2「ピッケル&
アイゼンの使い方」